

【学力向上フロンティアスクール用中間報告様式】(小学校用)

(都道府県 東京都)

・学校の概要(平成15年 4月現在)

学校名	昭島市立武蔵野小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	2	2	2	0	15	
児童数	94	89	90	77	79	76	0	505	22

・研究の概要

1. 研究主題

自ら課題を見つけ、自ら学ぶ子

--算数科を中心とした基礎学力の向上を目指して--

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年 算数(学力差が出やすい教科であるため。)

(2) 年次ごとの計画

平成14年度	<p>テーマ</p> <p>自ら課題を見つけ、自ら学ぶ子</p> <p>--算数科を中心とした基礎学力の向上を目指して--</p> <p>研究の見通し(仮説)</p> <ul style="list-style-type: none"> 算数の各単元において、一人一人の習熟の度合いを把握し、個に応じたきめ細やかな指導の方法として習熟度別少人数授業を実施することにより、基礎学力の向上が図れるであろう。 子どものやる気や意欲を高める方策を全教育課程に取り入れたり、系統的な不登校対策を取り入れることにより、総合的な学力の向上が図れるであろう。 教員の指導力向上を図り、指導法改善する取り組みを行うことにより、授業の質が高まり、結果的に学力の向上につながるであろう。 <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> 基礎学力の向上を目指し、授業研究を中心に、習熟度別少人数授業における発展的な教材や補充的な教材の開発を行い、個に応じた指導法の工夫や改善を追究する。 既習事項をもとに児童の作業的、体験的、探究的な算数的活動を追究し、新しい知識を身につけたときのうれしさや楽しさ、苦労して問題を解決したときの充実感が味わえるような授業の工夫・改善を追究する。 人と関わる力、根気強さ、困難なことにも挫けない子どもを育てる事業を行ったり、系統的な不登校対策を実施する。 校内研究とは別に、教員一人一人が年間を通して自分のテーマを持ち指導力向上
--------	---

を図る。

方 法

- ・算数科の習熟度別の指導計画を作成し、発展的な教材や補充的な教材の開発を行う。
- ・理解や習熟の程度に応じた指導方法や指導体制（少人数指導・TT による指導）の工夫や改善を行う。
- ・リアルタイムに児童の出席状況を把握し、不登校に至る前に校内で組織的な対応を図り、不登校対策を実施する。
- ・分科会を7分科会（各学年＋専科）とし、「研究主題に迫るための課題（分科会テーマ）」を設定する。また、研究の日常化を図り、共通理解をしながら研究を深めていく。
- ・教員個々の年間テーマに添った授業研究を行い、個人研究を深め指導力の向上を図る。
- ・各分科会は、授業研究を中心に研究を進め、日常の授業計画や授業記録等を残しておくようにし、年度末の冊子作成に役立てる。

テーマ

自ら課題を見つけ、自ら学ぶ子

平成 --算数科の習熟度別少人数指導を中心とした基礎学力の向上を目指して--

仮 説

- 15
年
度
- ・算数の各単元において、習熟の度合いに応じた発展的な教材や補充的な教材を開発し、習熟度別少人数授業を実施することにより、基礎学力の向上が図れるであろう。
 - ・子どものやる気や意欲を高める方策を全教育課程に取り入れたり、系統的な不登校対策を取り入れることにより、困難に立ち向かう強い心を育成し、総合的な学力の向上が図れるであろう。
 - ・教員の指導力向上を図り、指導法を改善する取り組みを行うことにより、授業の質が高まり、結果的に学力の向上につながるであろう。

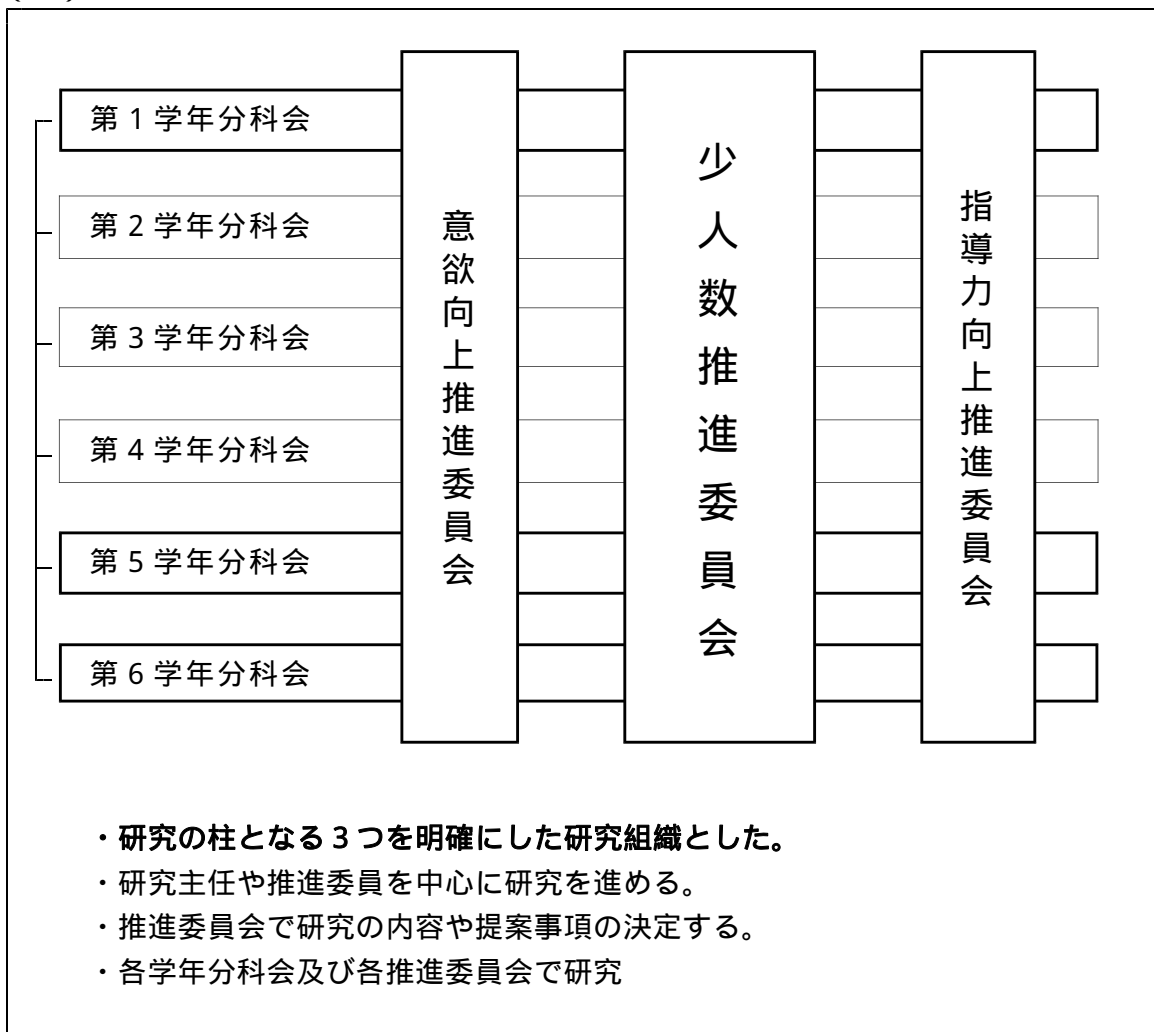
研究内容・方法

- ・14年度の研究成果と課題を踏まえつつ、児童がどのように学力が身に付いているのか、継続的に見取り、実証的に研究を進めていく。
- ・習熟度別少人数指導においては、自己選択を基本として実施し、児童の自己確立を総合的に推進していく。
- ・14年度は、「数と計算」領域を中心に習熟度別少人数授業の研究・実践を進めてきたが、15年度は、領域を限定せずに研究を進め、習熟度別少人数授業を実践する上でより有効な領域を模索することも付け加えた。
- ・14年度に作成したコース別の指導計画に基づき習熟度別少人数指導の授業内容をさらに発展・工夫し、基礎学力向上推進策を研究する。
- ・不登校と学力や体験活動との因果関係は密接なものがあるので、不登校に至る前の対策を系統的に行い、結果基礎学力の向上を図る。

- ・ 教員一人一人の経験や実績に応じて研修内容を決め、年間を通してテーマに添った個人研究を行う。
- ・ 平成15年度より教員のキャリアプランを作成することになり、教員の努力すべき目標を具体化し、個々の教員が指導力を正確に自己認識することにより資質向上につながると考えた。
- ・ 総合的な基礎学力向上策を研究し、学力向上フロンティアスクールとして平成15年12月5日（金）中間報告会を実施。

平成16年度	<p>テーマ 自ら課題を見つけ、自ら学ぶ子 --算数科の習熟度別少人数指導を中心とした基礎学力の向上を目指して--</p> <p>仮説</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 算数の各単元において、習熟の度合いに応じた発展的な教材や補充的な教材を開発し、単元の再構成を考え、習熟度別少人数授業を実施することにより、基礎学力の向上が図れるであろう。 ・ 子どものやる気や意欲を高める方策を全教育課程に取り入れたり、系統的な不登校対策を取り入れることにより、困難に立ち向かう強い心を育成し、総合的な学力の向上が図れるであろう。 ・ 教員の努力すべき目標の具体化や授業の点検項目を明確にし、個々の教員が指導力を正確に自己認識することにより、指導法改善し、授業の質を高めることにより、結果的に学力の向上につながるであろう。 <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 過去2年間の研究成果と課題を踏まえつつ、3年間の研究の成果として、児童一人一人の学力を継続的に見取り、学力向上の実証ができるよう評価の積み重ねをしていく。 ・ 発展教材や補充教材の開発と共に、単元構成・配当時数等を再構成し、より有効な指導計画の作成を行う。 ・ 不登校と学力や生活態度と学力との因果関係は密接なものがあるので、不登校に至る前の対策を系統的に行うとともに、生活指導面での指導法の改善を行い結果基礎学力の向上を図る。 ・ 校内研究における研修成果を生かし、教員一人一人の経験や実績に応じて目標を設定し、授業自己点検表で具体的に自己評価を行う。そして、年間を通してテーマにそった個人研究を行い、キャリアアップ研修として計画的に全員が研究授業を行う。 ・ 総合的な基礎学力向上策を研究し、学力向上フロンティアスクール最終年度として平成17年1月28日（金）に研究発表を実施する。
--------	--

(3) 研究推進体制



・ 平成15年度の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

「数と計算」領域以外に領域を広げて実践し、その可能性や留意点について考えることができた。(3年実践；ぼうグラフと表，5年実践；垂直・平行と四角形／4年発表授業；概数の表し方，5年発表授業；平行四辺形と三角形)

各コースの特色を生かして、指導を工夫することができた。(3年実践；課題の大きさの変化，4年実践；プレテストを生かした指導計画，5年実践；1時間の中の展開のコースによる違い，6年実践；じっくりコースの再構成(じっくりとあっぷ・じっくりコース)

一人一人が意欲的に学習できる授業の工夫をすることができた。(1年実践；算数的活動の工夫、学びのスタイルの多様化・2年実践；色別補充プリント・3年実践；身近な学習材・5年実践；パワーポイントの活用)

習熟度別少人数年間指導計画および評価規準を改訂することができた。

コース自己選択のための工夫をすることができた。(4年実践; プレテスト・5年実践; 自作レディネステスト・6年実践; フローチャート他、コースの途中再選択) 個に応じた指導を意識した、評価と指導のあり方を試行することができた。(1年実践; クラスにおける個に応じた指導・2, 3, 4, 5年実践; 各コースにおける児童の予想される反応やつまずきのタイプ別想定、座席型評価補助簿の活用・3年実践; コース別の単元末テスト・4年実践; 座席型評価補助簿等とつなげた個別指導記録ソフトの開発など

リアルタイムに欠席状況を把握することにより、不登校になる前に策を考えるようになった。

自然体験教室や菊の栽培事業が定着するようになり、子供たちが次の学年への期待をもてるようになった。

さまざまな活動を設定することにより、子どもたちが自分に自信を持つことができるようになった。

年代別に目指すべき目標を設定できた。

授業自己点検表で具体的に自己評価を行えるようになった。

東京都の政策と本校の方向が同一であり、目指すべきところが明確になってきた。

2. 今後の課題

レディネステストの作成にも、発展学習や補充学習の開発にも、深い教材研究が必要なことが研究途上でより明確になった。今後も各コースの充実を目指し、研究していきたい。

実態調査から、1年次2年次と大きな変容を認めることはできなかった。特に、文章題・応用問題を解くことへの抵抗感・自ら考えていく力の弱さは、研究の出発点となっていたにもかかわらず依然課題となる。3年次さらに「自ら課題を見つけ、自ら学ぶ子」の育成を意識して、ポイントを絞った研究に取り組んでいきたい。

指導者が次々と替わること、通知表・指導要録への評価記入は担任が行うこと等、少人数体制ならではの留意点があるが、児童一人一人ののびを継続的に見守り育てていくためにも個別指導記録の作成と活用について、工夫したい。

生活指導面での指導方法を改善すること。

児童のやる気を喚起し、根気強さをつけていく事業の工夫をすること。

方策の効果について実証することが難しいので、より明確にできるようにする。

年代別に目指すべき目標は、まだまだ抽象的であり、現実性をもたせたい。

授業にかかわらず、全般的な評価規準の設定が望まれる。

個々の指導力が向上したことを具体的に検証していきたい。

・学力把握のための学校の取り組みについて

- ・既習事項の定着度を把握するために年度初めと年度末に学力調査を実施
- ・東京都全体や13年度・14年度・15年度の本校の児童の実態と比較するために、東京都算数教育研究会の「数と計算」領域や「量と測定」領域の実態調査を年度末に実施

・フロンティアスクールとしての成果の普及について

研究会、説明会等の開催実績及び開催予定

- ・平成15年 4月23日 午後2時30分より 本校家庭科室
対象(本校職員・市内教員・保護者)
講演会「子どもの個性を生かした算数教育の実現」
という演題で講演会を実施
年間講師 東京学芸大学教授 伊藤 説朗先生
- ・平成15年10月26日 午後7時より 本校会議室
対象(本校学校評議員)
今年度の研究の実施状況報告
- ・平成15年12月 5日 午後1時45分より 本校各教室・体育館
対象(都外・都内・市内・保護者・地域)
全クラス授業公開し、今年度の研究実践ならびに成果
や課題等を報告・研究冊子作成・配布
全国・都内・市内・保護者等約600名の参加
- ・平成16年 1月16日 三重県より研究視察に来校
- ・平成16年 1月23日 宮崎県より研究視察に来校
- ・平成16年 1月30日 秋田県より研究視察に来校
習熟度別少人数指導の授業公開並びに研究成果の報告
- ・平成16年 2月21日 午後2時より 本校家庭科室
対象(保護者)
教育課程説明会を実施し、学力向上推進校としての
15年度の研究実践を報告及び16年度の説明

研究成果普及のためのHP作成、パンフレット作成等の実績

- ・HPを毎日更新し、研究実践や研究授業の様子・研究冊子・講演会内容等を掲載
(<http://www.m-net.ne.jp/~musasino>)
- ・15年度の研究成果をまとめ、研究紀要作成
- ・算数の全単元におけるコース別指導計画・評価規準のCD作成

フロンティアティチャーとしての研究成果普及のための活動実績及び予定

- ・平成15年12月10日 フロンティアスクールの埼玉県白岡東小学校との研究
交流
- ・平成16年 1月20日 福井県武生市より招聘され、研究成果発表
- ・平成16年 2月25日 午後3時30分より 昭島市公民館小ホール
対象(教育委員・市内教員)研究の実践報告

次の項目ごとに、該当する個所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】 1 5 年度からの新規校 1 4 年度からの継続校

【学校規模】 6 学級以下 7 ~ 1 2 学級
 1 3 ~ 1 8 学級 1 9 ~ 2 4 学級
 2 5 学級以上

【指導体制】 少人数指導体制 T . T による指導
 一部教科担任制 その他

【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無